

2 公務員獣医師確保に向けた取り組み

○山中英季 高野真帆

要約

全国で公務員獣医師の確保が課題となっている中、東京都でも近年、農林水産部局の獣医師に欠員が継続して生じている。そこで当所では、昨年度、公務員獣医師及び家畜保健衛生所業務の魅力発信を目的として、広報活動、漫画制作への協力及び実習・見学受入の拡充に取り組んだ。広報活動では、従前の広報対象から、より広い層をターゲットとするため（公社）日本獣医師会主催の「動物感謝デー」に出展し、ブースでの検査手技体験、アンケート及び獣医学生への個別説明を実施するとともに、ステージイベントで家保の業務やアフリカ豚熱に関する注意喚起を行った。また、小中学生向け学習漫画の制作に協力し、産業動物獣医師及び公務員獣医師の仕事の意義や魅力を発信した。さらに、獣医学生等の実習受入に加え、中学生の職場体験受入を実施し、対象者の年齢や理解度に応じた内容で家保業務への理解促進を図った。これらの取組により、一般来場者、小中学生及び獣医学生に対し、多面的な情報発信の必要性と公務員獣医師確保に向けた継続的な広報の重要性が示された。

秋田県¹⁾、青森県²⁾など多くの県で報告されているとおり、全国的に公務員獣医師の確保が課題となっている。東京都（以下、都）においても近年、農林水産部局の獣医師に欠員が継続している状況である（図1）。

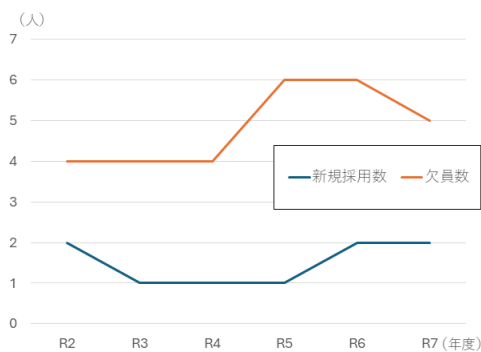


図1 農林水産部獣医師職の充足状況

その背景として、職員の退職が進む一方で、入庁希望者数の減少に伴う新規採用職員数の減少が挙げられる。都の獣医師職職員の募集は公衆衛生部局、農林部局あわせて一括して行っているところであるが、都の獣医師職の受験倍率は低下傾向にある（図2）。

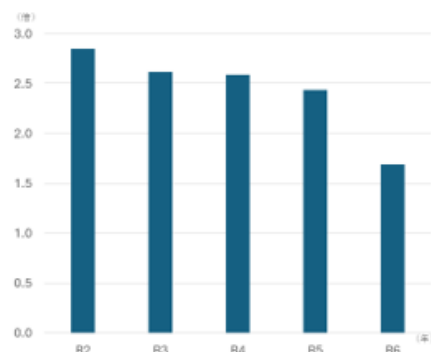


図2 東京都獣医師職受験倍率の推移

また、全国的にみても農林水産部局の公務員獣医師の割合は8%と割合が低い状況である（図3）。

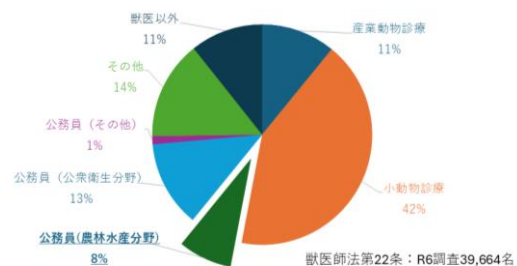


図3 全国の獣医師の就業先（%）

このような状況を踏まえ、当所では公務員獣医師の魅力発信の強化が必要と考え、

公務員獣医師確保、特に家保の獣医職の確保を目的とした広報活動及び実習・見学受入の拡充等の取組を実施したので、その概要を報告する。

動物感謝デーへの出展

当所では従来、青梅市内で開催される家畜に関するイベントに出展し、家畜保健衛生所（以下、家保）の紹介及び家畜伝染病に関する普及啓発を行ってきた³⁾。しかし、来場者数は約 900 名で、かつ、来場者の多くは近隣住民であったことから、周知範囲に限界があった。そこで、令和 7 年度は、(公社) 日本獣医師会が主催する「動物感謝デー」に出展した。本イベントは、2007 年から毎年秋に開催しており、動物の社会的役割、適正飼養の重要性及び獣医師の役割を広く普及啓発することを目的としている⁴⁾。毎年、多数の来場者が訪れ、令和 4 年度は約 5, 000 名、令和 5 年度は約 7, 000 名の来場者数が実績として報告されている⁵⁾。また、来客層も一般市民のみならず、児童・生徒・学生、獣医療関係者、獣医学系大学生もターゲットとしていることから、より広くかつ効果的な発信が見込まれた。あわせて、多くの獣医学系大学生の来場が見込まれるため、公務員獣医師の魅力発信の場として活用することとした。本イベントの参加にあたり、当所ではブース出展及びステージイベントを企画し、来場者への情報発信を行った。なお、来訪者にできるだけブースに立ち寄りてもらい、後述する検査手技体験やアンケートに参加してもらえるよう、参加者には多摩産材で作成したノベルティ（図 4）を配布した。



図4 多摩産材で作成したノベルティ

1 ブースでの検査手技体験

業務の一部を体験してもらい、家保獣医師の業務をより身近に感じてもらうことを目的として出展したブース（図 5）においてピペット操作体験と顕微鏡での検査体験を実施した。ピペット操作体験では、水を入れると色が変わるキットを用い、ELISA 検査体験を実施した。顕微鏡を用いた検査体験では、細菌や寄生虫の実物標本を提示し、顕微鏡で豚回虫やコクシジウムの病理切片を観察してもらった。さらに、寄生虫の侵入機序やそれによっておこる症状について資料を使って説明し、家畜の様々な病気についてもあわせて普及啓発を行った。



図5 ブースの様子

2 デジタルサイネージを活用した情報発信

ブースではデジタルサイネージを用いて東京の畜産紹介や家保の業務紹介、伝染病予防啓発を行った。デジタルサイネージは、壁面のポスター展示と異なり、その明るさや画面の切り替わりによる動的演出など、来場者の目を引きやすくする効果がある⁶⁾。また、自動的な画面の切り替わりは、より多くの情報を来場者に与えることが可能となる。当所ではさらに視認性を高めるため、それぞれのテーマごとに情報を 1 画面でコンパクトにまとめて表示し、より来場者に視覚的に分かりやすく情報を伝えるように工夫した（図 6）。



図6 デジタルサイネージでの家保業務紹介画像

3 リクルート活動

ブースでは後述のアンケートを実施し、本アンケートに答えた獣医学生や、家保に興味のありそうな獣医学生を対象に、畜産農家への衛生指導、家畜疾病診断のための検査等、当所の詳細な業務紹介を実施した。また、当所の見学も随時可能なこともあわせて説明した。

4 ステージイベント

ステージイベントでは、パネルを用いたクイズを行い、家保の業務や家畜伝染病の普及啓発をわかりやすく説明した(図7)。業務紹介では、家保が対象としている家畜の種類や、農場訪問時の服装、採血道具をクイズとともに説明した。また、アフリカ豚熱についても説明し、山やバーベキュー場などでの食べ残しのゴミの持ち帰りなどの注意喚起を行った。



図7 ステージでの様子

5 アンケートの実施

家保業務の認知度、獣医師への関心、家畜伝染病の認知度を把握するためにアンケートを行った。来場者の構成や年代

による家畜伝染病の認知状況を把握するために、回答者を「小中学生」「高校生」「獣医学生」「獣医学生を除く大学生・大人」の4つの区分に分け、区分によって回答箇所貼るシールの色を変えることで、どの区分がどのような傾向があるかについて分析ができるよう工夫した。アンケート内容と結果は以下のとおりであった。

1) 家保の認知度

「家保を知っているか」という設問に対し、高校生以下で「はい」が11%、「いいえ」が89%、獣医学生で「はい」が93%、「いいえ」が7%、獣医学生を除く大学生・大人は「はい」が47%、「いいえ」が53%だった(図8)。

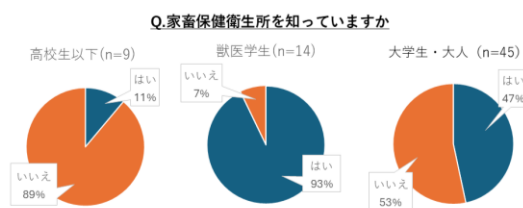


図8 家保の認知度アンケート結果

2) 獣医師への関心

この設問は高校生以下を対象に実施した。「獣医師に興味はありますか」という設問に対し、「はい」が89%、「いいえ」が11%だった(図9)。

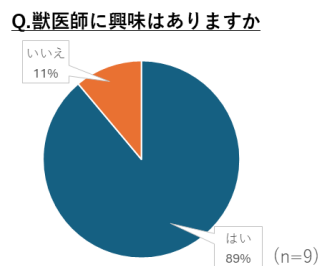


図9 獣医師への関心アンケート結果

3) 家畜伝染病の認知度

設問を「この中で知っている病気はありますか」とし、提示した病気は「鳥インフルエンザ」「豚熱」「アフリカ豚熱」「口蹄疫」とした。鳥インフルエン

ザを知っていると回答した人は高校生以下で 100%、獣医学生で 71%、獣医学生を除く大学生・大人で 98%、豚熱を知っていると回答した人は高校生以下で 33%、獣医学生で 64%、獣医学生を除く大学生・大人で 64%、アフリカ豚熱を知っていると回答した人は高校生以下で 22%、獣医学生で 64%、獣医学生を除く大学生・大人で 33%、口蹄疫を知っていると回答した人は高校生以下で 33%、獣医学生で 79%、獣医学生を除く大学生・大人で 91%となった（図 10）。

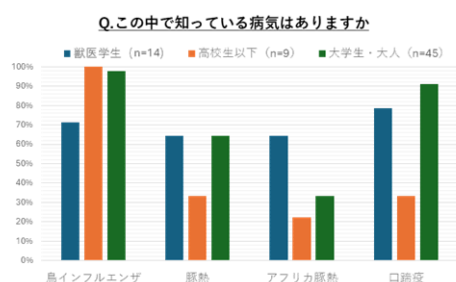


図10 家畜伝染病の認知度アンケート結果

産業動物獣医師を紹介する 漫画の制作協力

「学研まんがでよくわかるシリーズ」で知られる学習漫画『獣医師のひみつ』（地方競馬全国協議会協力、(公社)日本獣医師会、(公社)全国農業共済協会監修）の制作に当たり、当所は出版社及び執筆者に対し、施設案内、業務説明及び取材対応を行った。本漫画は、小中学生に「動物の命と私たちの暮らしを支える獣医師」の仕事への関心を持ってもらうことを目的としており、家保、農業共済家畜診療所及び動物検疫所の業務が紹介されている⁷⁾。当所では、獣医師を志したきっかけ、公務員獣医師としてのやりがい及び業務の意義等を伝え、本内容は約 20 ページにわたり掲載されている。本誌は学校配布のほか、「Gakken×朝日新聞 キッズネット」のウェブサイト上にも掲載され、だれもが閲覧可能となっている。

中学生の職場体験受入

当所では従前より獣医系大学や中央畜産会からの獣医学生の実習を受け入れていたが、令和 2 年、現在の庁舎への移転を機に見学者受入要領を改定し、近隣中学校の職場体験の受入を開始した。獣医学生の実習では、細菌・ウイルス検査、生化学検査等の病性鑑定業務に加え、防疫及び指導業務の研修を実施していた。一方、中学生の職場体験では、年齢や当所を職場体験先として選んだ理由などに応じた実習内容とした。例として鶏の飼養管理や培地の作成、生乳検査等を体験してもらい、畜産や身近な食と当所の業務関係を自身の体験として理解してもらえるような内容とした。

考察

今回の取組では、家畜の伝染病や家保業務の認知度の再確認と公務員獣医師も含め家保業務の魅力を多面的に発信した。

動物感謝デーで行ったアンケート結果では一般の方は「家保を知らない」とする回答がやや多く、一方で獣医学生は家保の認知度が高かった。また、家畜伝染病の認知度では高校生以下、獣医学生を除く大学生・大人では鳥インフルエンザや口蹄疫の認知度は高い一方、豚熱やアフリカ豚熱の認知度は低い結果となった。獣医学生では疾病ごとの大きな認知度差はなかったが、全体として認知度は比較的低い傾向となった。同様のアンケートは令和 4 年度に当所が青梅市内でのイベントでも行っているが、「家保を知らない」と回答した人が 63%であった³⁾。今回の結果では「獣医学生以外の大学生・大人」で 53%が「家保を知らない」と回答している。この違いはアンケートの回答者の母集団がそもそも異なることため、一概に家保の認知度が向上したとは言えない結果であった。一方、家畜伝染病の認知度については「鳥インフルエンザ」「豚熱」「口蹄疫」にあっては今回の結果とほぼ同等の結果であった。この背景には、マスコミ報道や SNS 等を通じた情報接触の

影響があった可能性がある。

特に「アフリカ豚熱」にあっては令和4年度の結果では認知度が0%であったが、今回の結果では「獣医学生を除く大学生・大人」で33%と認知度が上昇していた。認知度が上がった理由としては、令和4年5月以降の韓国でのアフリカ豚熱発生の急増に伴い、農林水産省が主体となってマスコミを始め各種広報媒体により国内侵入防止にかかる普及啓発活動が功を奏した可能性がある。すなわち、家畜の伝染病や家保の認知度を高めるためには広くかつ、継続的に広報活動を行っていくことの重要性を改めて認識する結果となった。

獣医学生では家保の認知度は高いものの、それと比較して家畜伝染病の認知度が低かった。家畜伝染病の認知度は、畜産分野への接触機会や関心の一端を示す可能性があるが、報道状況や学修段階、社会的関心など複数の要因に左右されるため、関心度そのものを直接示す指標とは言い切れない。獣医学生の畜産や産業動物獣医師、公務員獣医師への関心度については別途調査が必要である。

動物感謝デーで行ったリクルート活動では獣医学生から公務員試験の日程や、島での勤務についてなどの質問が寄せられた。獣医学生のなかでも公務員獣医師に興味のある学生に対し直接働きかけを行うとともに獣医学生が東京都の公務員獣医師のどのような内容について興味があるかについての情報を得ることもできた。直に獣医学生と対話を行うことで、公務員獣医師希望者の新たな発掘や獣医学生と公務員獣医師という職のミスマッチを防ぐ効果が期待できる。

今回出展した動物感謝デーは幅広い層が来場し、特に高校生以下の来場者の多くが獣医師に興味を持ってイベントに来場していることが、アンケートの結果からもうかがわれた。したがって、本イベントは家保の役割や家保獣医師の仕事の認知度向上に加え、高校生以下の来場者

に公務員獣医師にも興味を持ってもらいやすい機会の創出ができる場でもあると考えられる。

かつては、獣医学生を対象に公務員獣医師への志向を向上させるかが主たる課題であったが、今回の動物感謝デーでの取り組みや産業動物獣医師を紹介する漫画の制作協力、中学生の職場体験の受入を通じて、小中学生などの早い段階から継続的に情報発信を行うことは、将来的な公務員獣医師の確保に資する可能性がある。

今回の取り組みを通じ、対象者の年齢や関心に応じて発信手法を変えることで、認知度向上から将来の進路選択支援まで、段階的な働きかけが可能であると考えられた。今後も継続的に広報及び受入体制の充実を図り、公務員獣医師確保に向けた取組を推進していく。

なお、本報告で示した各取組は、公務員獣医師確保に向けた広報が、単発的な周知ではなく、認知の形成から職務理解、さらには進路意識の醸成へとつながる段階的な働きかけとして構成されるべきことを示している。家保の業務は、日常生活との関わりが直感的に理解されにくい側面もあるが、その社会的役割を適切な媒体と対象設定のもとで伝えることにより、関心を具体的な職業理解へ結び付けられる可能性がある。今後の人材確保においては、このような発信を継続的かつ計画的に積み重ね、公務員獣医師という進路を早期から選択肢の一つとして認識してもらう環境づくりが重要である。

引用文献

- 1) 三橋洋貴ほか：秋田県産業動物獣医師の確保に向けた取組, 令和5年度秋田県獣医畜産技術研究発表会集録(2024)
- 2) 佐藤郷子ほか：「獣医師の魅力を伝える」職業講話の取組, 平成30年度青森家畜保健衛生所業績発表会集録(2018)
- 3) 穴水真奈ほか：家畜保健衛生所の広報活動推進, 令和4年度東京都家畜保健

衛生所業績発表会集録（2023）

- 4) 公益財団法人 日本獣医師会：2025 動物感謝デー in JAPAN “World Veterinary Day” 開催趣意書，
（<https://doubutsukansha.jp/2025/pdf/doubutsukansha2025.pdf>），（令和7年3月）
- 5) 公益財団法人 日本獣医師会：2024 動物感謝デー in JAPAN 実施報告書，
（<https://doubutsukansha.jp/2024/img/20241021.pdf>），（2024.10.21）
- 6) 原田美咲ほか：デジタルサイネージの効果測定手法の検討，第74回全国大会講演論文集，（2012.3.6）
- 7) マリサ：獣医師のひみつ～動物の命と私たちの暮らしを支える～，高尾俊太郎，第1版，1頁，株式会社 Gakken，東京，（2026）

